

「くすのき・125」は、京都大学創立125周年を記念して設立された、寄付金を原資とした学内ファンドである。本発表では、学術研究展開センターのURAが実施した制度設計、振り返りを通じた制度改変、およびその結果について報告すると共に、採択者のビジョンを紹介する。

制度設計

京都大学における研究環境を取り巻く課題

- 効率的に成果を引き出すことを目的とした国の「選択と集中」政策により、
- 運営費交付金が削減され、使途の自由度の高い研究費が不足
- 論文数や特許数など可視化しやすい成果によって、学問の価値を計測する風潮が蔓延
- 長期的に失敗を恐れず自由な発想で追及すべき研究の実施が困難

課題への取り組み：くすのき・125の3つの特徴

- あらゆる研究が対象**
 - 研究分野、基礎/応用、研究フェーズ等を問わない
 - 自身の描く長期的なビジョンに沿い、自由な発想に基づいたテーマを期待
- 自由度の高い経費**
 - 通常の外部資金では支出できない様々な用途に利用可能
 - 3年の支援期間の初年度に一括渡し切り、年度をまたいだ繰り越し使用可能
- 採択後の「義務」が無い**
 - 短期的な成果を要求せず、過度な義務を課さない
 - 研鑽して学問に迫る「責任」を負うと共に、寄附者の思いを真摯に受け取る

くすのき・125 書面審査の観点

- 京大の基本理念に立ち返ったうえで進むべき方向を見据え、既存の価値観にとらわれず、未来の「調和した地球社会のビジョン」を自らの自由な発想で独創的に描いているか。
 - 自身が思い描く未来の「調和した地球社会のビジョン」構築に向かう道筋の中で、自身が次の世代に継承すべき学術領域を具体的かつ独創的に思い描いているか。
 - 描く未来の「調和した地球社会のビジョン」および次の世代に継承すべき学術領域の構築からバックキャストして、今後3年間程度で行うべき発展性のある独創的な研究を見出しているか。
 - 本提案を遂行していく能力を有していると考えられるか(※)。
 - 予算の活用計画が本ファンドの趣旨に合致しているか。
- (※)2022年度公募では、審査の観点④を除く

制度改変とその結果

2020	申請		書面審査通過		採択	
	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合
教授	18	11.9%	6	27.3%	5	41.7%
准教授	52	34.4%	8	36.4%	3	25.0%
講師	19	12.6%	0	0.0%	0	0.0%
助教	61	40.4%	8	36.4%	4	33.3%
研究員	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
総数	151	-	22	-	12	-
平均年齢		40.7		42.5		42.1

2021	申請		書面審査通過		採択	
	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合
教授	9	7.4%	2	6.3%	0	0.0%
准教授	43	35.2%	13	40.6%	4	28.6%
講師	11	9.0%	2	6.3%	1	7.1%
助教	56	45.9%	14	43.8%	9	64.3%
研究員	3	2.5%	1	3.1%	0	0.0%
総数	122	-	32	-	14	-
平均年齢		41.4		41.3		38.9

2022	申請		書面審査通過		採択	
	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合	n	総数に対する割合
教授	11	8.8%	4	11.1%	1	7.7%
准教授	39	31.2%	7	19.4%	2	15.4%
講師	18	14.4%	3	8.3%	0	0.0%
助教	55	44.0%	21	58.3%	10	76.9%
研究員	2	1.6%	1	2.8%	0	0.0%
総数	125	-	36	-	13	-
平均年齢		40.8		39.6		37.6

公募に関する振り返り (2020年度)

- 他の職位と比較した教授職の申請割合は低かった(11.9%)にも関わらず、採択された割合は最も高かった(41.7%)
- 外部資金等の他の研究費で実施できると思われる研究提案が、採否に関わらず散見された(審査員コメントでの指摘)

主な制度改変 (2020 → 2021)

- 書面審査員に対して、申請者の個人情報(氏名/年齢/職位)を非開示にした
- 申請書に「なぜ他の競争的資金ではなく、くすのき・125に応募したのか」を記述する項目を新設した
- 申請書の専門分野に関わらず、人社系、理工系、生物系すべての専門分野の審査員による審査体制とした

公募に関する振り返り (2021年度)

- 長期的なビジョンを問いつつ、3年間で実施する研究に落としこむことを求めるというファンド趣旨への疑義が挙がった(審査員への事後アンケート)

主な制度改変 (2021 → 2022)

- 前回の改変項目は続行
- 書面審査員に対して、申請者の個人情報(氏名/年齢/職位)の非開示を徹底した
- 書面審査における、研究の遂行能力を問う審査の観点(観点④)を廃止した

公募に関する振り返り (2020 → 2022年度)

- 申請数における職位の割合は公募3年間で顕著な変化がなかったが、書面審査通過および最終採択における職位の割合は制度改変に伴って変化した、教授の割合が減少して、助教の割合が増加した(左表)
- 申請者の平均年齢は公募3年間を通じて同程度であったが、書面審査通過者および採択者の平均年齢は制度改変に伴って低下し(左表)、採択者の最高・最低年齢も低下した(data not shown)
- 外部資金等の他の研究費で実施できると思われる研究提案が減少した(審査員コメントでの指摘)

考察

書面審査において申請者の個人情報(氏名/年齢/職位)を非開示としたことにより、審査員の無意識のバイアスが減少し、採択者の職位と平均年齢が下がった可能性が示唆される。ただし、情報非開示と若年化に因果関係があるかどうかについては現情報のみでは検証できない。

採択者のビジョンと声

- なぜ、くすのき・125に応募したのですか？
 - 現在の専門を超えた研究にどうしても挑戦したいが、他の研究費は業績が十分に無いと応募できない
 - 独創性は評価していただけるテーマだが、また業績が十分にないため、申請できる研究費が無かった
 - 極めて挑戦性の高いテーマであるため、確実な成果を短期的に求める他の研究費には応募できなかった
 - 数百年単位の視野が必要な超長期的なテーマを申請できる研究費は他に無かった
 - 学際性が高く、既存の学問領域に当てはまらないテーマであるため、申請できる研究費が無かった

- 環境微生物・ウイルスのドライな謎にウェットに迫る (岡崎友輔)
- ヒトと動物の共存する未来のために (徳山奈帆子)
- 美を体験するところと脳-美認的人文科学の確立 (上田電平)
- 「たいよう」と「みず」の力によって実現するカーボンニュートラル (寺村謙太郎)
- 「音」を利用した次世代バイオテクノロジーへの挑戦 (桑田昌宏)
- 発達障害への理解が切り開くダイバーシティ (上月遥)
- 子どもが未来を巡る社会の実現：未来開拓学 (森口佑介)
- 公衆衛生看護ケアのイノベーション基盤の構築 (塩見美紗)
- 第三の素材：高機能タンパク質のデバイス素子化 (藤田大士)
- 「脳腫瘍になった。だけど未来がある」を支えたい (田畑阿美)
- 脳器提供数と移植数の調和を目指した肺移植医療の実現 (中島大輔)
- 健康な赤ちゃんを：前駆破水・早産を減らす (最上晴太)
- 医療社会の発展に貢献する「アパタイト学」の構築 (森塚武史)
- 神経細胞を用いた高次脳機能再現法の確立 (田中洋光)

- 地球熱システムの包括的理解が拓く地球と共存する社会 (澤山和貴)
- 筋収縮の液を使って臓器の『かたち』を創り出す (稲葉真史)
- 『乱雑さ』の科学から生まれる新しい物質開発 (向吉恵)
- 『細胞内マイクロ建築学』の創成 (中村秀樹)
- 『記憶』研究を社会応用するための技術開発 (後藤明弘)
- がんの遠隔転移は予防できるのか？ (中島良太)
- 東アジアの木彫像の用材をめぐる学際融合研究 (田鶴寿弥子)
- 化学反応の『振動』と光触媒で実現する化学デバイス (浪花晋平)
- 酵素と電極の直接接合によるバイオメテックス (宋和慶盛)
- 未来のサニテーションが実現する自由なくらしと水・物質循環 (原田英典)
- サステイナブル有機合成 (大宮寛久)
- オージェ電子を用いた新規放射線治療を創出する (松本光太郎)
- 持続可能なエネルギー利用を実現する振電工学 (志津功將)



- 核の個性が顕在化する分子科学から水素社会の実現へ (金賢得)
- 人と動物の調和した地球社会を目指して：動物福祉科学 (宮部貴子)
- 環境保全と経済開発が調和する生態系デザイン (佐藤宏樹)
- サクセスフルエイジング実現のための脳老化学 (土居雅夫)
- 低温プラズマを援用したバイオリアクター (南英治)
- 「眠れる力」を呼び覚ます脳科学で創る夢の未来 (林悠)

- アフリカの人道危機を解決する実践平和学 (大山修一)
- 不要細胞の除去から目指す健康寿命の永続 (鈴木学)
- 実証法学的確立に向けた法哲学的方法論の探究 (稲谷龍彦)
- がんの上皮間葉転換を免疫治療で制御できるか (滝真奈)
- 非平衡生体分子科学が築く健康長寿社会 (菅瀬謙治)
- 生物素材の学理に基づいた循環型材料の創出 (沼田圭司)

詳しいビジョンはこちら

真に求められる研究支援とは？

- 無意識のバイアスが発生しにくい評価体制を模索し続けることにより、より多様な研究が実施されるような研究環境を醸成する
- 研究成果への過度で短期的な義務を課すのではなく、学問を真摯に追求する責任を自覚できる研究環境を醸成する
- これらの好循環を促すような研究支援体制を構築する

